

少し粉っぽい風に痛みまくった髪がそよぐ。春の気だるさを欠伸で散らしながら、土井は学園の外れを歩いていた。パン、と小気味よい音が聞こえてくる。どこから聞こえてくるのだろうか。首を巡らせれば、近くにある武道場から人の気配がした。誘われるように近付き、そと中を覗く。先程の音は矢が的中する音だったようだ。そこは弓道場だった。

剣術師範として戸部新左衛門を教師に迎えていることから分かるように、文武両道を目指すこの学園では武道系の施設も充実している。事務員に届け出さえすれば、生徒は誰でも自由に使うことが出来た。

土井が見守る中、射手は再び矢を番えて打ち起こす。流れるような動作で引き分けると、きりきりと弦を引き絞った。じっと狙いを付け、張り詰めた空気をそのままに真っ直ぐ矢を放つ。また的中した。

「お見事」

突然の拍手に、兵助は大きな目をばちくりする。振り返れば、いつの間にもやら入り口に土井がいた。所作もそこに慌てて駆け寄る。

「土井先生！いつからいらしていたのですか？」

「ついさっきだよ。甲矢の音が聞こえてきたから、見物に来たんだ。しかし上手いもんだなあ。流石は成績優秀、文武両道の久々知兵助だ」

「からかわないで下さいよ。今度の授業で三郎たちと勝負をすることになったので、練習してたんです」

そう言うと、兵助は弓を弓立てに戻して瓊を外した。袴を身に付けているからか、姿勢のよさが際立つ。

委員会活動は盛んだが、この学園には何故か部活動がない。なので兵助も弓道部員ではなかった。だが前述の通り施設は充実しているので、授業のバリエーションは豊富である。勿論、学園長の思いのつきの所為もあるが。

その学園長の思いのついで、今度五年生はクラス対抗の弓道大会をやることになった。成績優秀な者の集まった組としては、他のクラスに負けられないだろう。

「鉢屋三郎か。あいつはどうもムラッ気があるからなあ。しかしなんでまた勝負なんだ？お前はそこまで勝負好きでもないだろう。用具委員長じゃあるまいし」

「勘右衛門と三郎が委員会のとくに、盛り上がりつつ決まりました。あの二人は学級委員長委員会ですから」
呆れたように兵助は嘆息した。二人が勝負する分には構わないが、何故か不破雷蔵、竹谷八左衛門を含めた五人でラーメンを賭けて勝負をすることになったそうだ。平均してどちらの的中が良いかで勝敗をつけるので、ピリにならなければならないという問題でもないらしい。

「それは災難だな」

「笑い事じゃないですよ。三郎はああ見えて不敗神話の持ち主です」

それでも勝負に乗るあたり、兵助も案外負けず嫌いなのかも知れない。豆腐が懸かっているにせよは随分とやる気を出していた。